

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03580

研究課題名(和文)近代日本における在来産業産地の多様性についての分析 - 陶磁器業を対象として -

研究課題名(英文) Analysis on the diversity of traditional industry's areas in modern Japan -  
Focusing on the ceramic industry

研究代表者

宮地 英敏 (MIYACHI, Hidetoshi)

九州大学・記録資料館・准教授

研究者番号：90376575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本において特定の産地が競争力を持って成長していく中、それら大産地よりは大きく後塵を配するものの、それでも一定の生産額を誇り続けた産地について、その存続のメカニズムを考察したのが本プロジェクトである。プロジェクトを通じて、産地毎に存続のメカニズムもまた多様であったことが発見された。

具体的には、萩焼は茶道の千家との関係性を強めることによって「一楽二萩三唐津」のキャッチフレーズを得て成長したし、会津本郷焼は碍子の官需を受注することで成長したし、京焼は芸術的な価値の高さで優遇されることで存続していた。一方で、三川内の場合には、産地分析を間違えた評論家の意見を真に受けて伸び悩んだ点が確認された。

研究成果の概要(英文)：In this project, I analyzed the diversity of the ceramic industry's areas. In modern Japan, along with the growth of several major ceramic industry's areas, many small production areas also remained. I discovered that the variety of ceramics production area's survival strategy were diverse. Specifically, I examined three cases. The first case, Hagi-Yaki pottery survived by strengthening ties with the tea ceremony of the descendants of SEN no Rikyu. The second case, Aizu-Hongo-Yaki porcelain survived by insurance trading with the government agency, especially with the Ministry of Communications and the Ministry of Army. The last case, Kyo-Yaki ceramics survived due to the high artistic value, even during wartime. On the other hand, there was also a fallen production area. For example, Mikawachi-Yaki porcelain couldn't grow because manufacturers had trusted critic's wrong analysis.

研究分野：日本経済史、日本経営史、日本近代史

キーワード：在来産業 陶磁器 萩焼 三川内焼 会津本郷焼 京焼 碍子 茶道

### 1. 研究開始当初の背景

申請者が『近代日本の陶磁器業-産業発展と生産組織の複層性』名古屋大学出版会(科研費若手研究(B)の成果でもある)を刊行した際に、多くの書評をいただいた。その中に、近代の陶磁器業の複層性を分析しているもの、それは生産額の上位産地に限られており、近世来の伝統を持つ多くの小規模な産地が、何故に淘汰されずに経営を維持することが出来たのか、という問いかけを貰った。

具体的な問いかけは上記拙著に対して貰ったものであるが、実はこの点は近代における在来産業とも呼ばれる小零細産業の分析において、多くの研究者達が共通して抱えていた問題点であった。上記指摘は近世経済史の研究者からのものであったが、近代経済史研究においては産業や産地の成長とのかかわりからの分析に主眼がおかれてきたため、近世期において諸藩が横並びで産業を抱えていた時代の分析との、関連性が不明確になってしまってきたのである。

近世と近代が幕末開港によって大きく断絶しているという考え方ならば、それでも良かったかも知れない。しかしながら、近世と近代との間の連続面と断絶面を共に考察する昨今の研究状況を踏まえれば、陶磁器業を始めとする多くの在来産業分野の近代の分析は、不十分であったと言うほかないのである。

本プロジェクトは、そのような問いかけに答えるべく、産地としての生産額が全国に占める割合は少ないものの、特徴的に生産を維持し続けた産地についての分析を行いたいという思いから研究を開始している。

このプロジェクトにあたっては、日本の地域産業の存立においても重要な論点を孕んでいるのではないかという目論見を抱いていた。競争力の高い企業や産地の登場によって、競争力の低い企業や産地が淘汰されて行くというのが、経済学的にはオーソドックスな理解である。しかし実際に日本経済においてかつて起こった、そして現在も続いている状況は、大企業や大産地が隆盛しようとも、必ずしもすべての小零細企業や小産地が消失してしまうわけではない。それでは、その大企業や大産地と並行して生き残ることができたメカニズムを明らかにすることが出来れば、今後の日本経済と小零細産地にとっても重要な示唆を含んでいると考えたためである。

### 2. 研究の目的

近世期における陶磁器業産地として賑わっていたながら、近代的な経済発展の波には取り残されつつも、それでも近代になっても消滅することなく存続を続けた産地が、日本国内には大量に存在する。それは、大量生産体制が一般化する中において、何らかの手段によって生き残りを図ってきたことを意味し

ている。本研究では、そのように大量生産以外の手段によって生き残りを図ってきた産地について、陶磁器業を対象として、そのメカニズムを明らかにすることを目的とした。

可能性としては、大量生産以外の生き残り戦略が一通りの場合と、生き残り戦略が複数ある場合がある。しかも、複数ある場合にも2パターンだけのケースと、3パターン以上あるケースが考えられるため、3カ所以上の様々な陶磁器産地についての生き残り戦略を具体的に考察することとした。

### 3. 研究の方法

申請者がこれまで研究を行ってきたような大規模産地(具体的には、美濃焼の岐阜県東濃地方、瀬戸焼の愛知県瀬戸地方、有田焼の佐賀県有田地方)以外の陶磁器産地の中から、いくつかの産地をピックアップすることにより、それらの産地が何故に淘汰されずに経営を維持し続けることが出来たのか、または衰退せざるを得なかったのかという観点からの分析を行うこととした。

ただし、陶磁器産地の資料の残存状況は、これまでの経験から必ずしも十分な産地ばかりでないことが明らかであった。そのため、最初から特定の産地に限定することなく、余裕を持ちつつ多くの陶磁器産地について資料蒐集に努めながら、資料が十分に蒐集できた産地について分析を進めていくという方法を選択した。

具体的に候補として資料蒐集を試みた産地としては、山口県萩地方の萩焼、京都市の清水焼、長崎県佐世保市の三川内焼、福島県会津地方の会津本郷焼、栃木県の益子焼、沖縄県那覇市の壺屋焼、愛知県の犬山焼などが挙げられる。この中から、近世期から近代にかけての時期の生き残り戦略について分析出来るだけの資料が残存している産地についてピックアップした上で、その限定された産地についてより詳細な分析を行っていくこととした。

### 4. 研究成果

資料蒐集の段階において、研究目的として掲げた近世期から近代へという移行期において、産地がどのような生き残り戦略を可能としたのかという点について、考察可能だと判断された産地は4箇所みられた。そのため、その4つの産地を中心に分析を深めた。

第1は萩焼である。萩焼は、豊臣秀吉による朝鮮出兵と前後して朝鮮人陶工を招致したために出発した産地である。この萩焼は、近世期においては陶器と磁器の両方を生産しており、どちらかと言えば磁器生産が中心的な産地であった。

しかしながら、近代にはいると萩焼は茶陶といわれるように、茶道用の陶器生産を中核としつつ産地を発展していくこととなる。その切っ掛けとなったのは、幕末期における長

州藩士と千家との関係であった。長州藩士たちが勤皇の志士として京都で活躍していた時、千家はそれへの協力を惜しまなかった。維新後、有力大名家の茶頭の地位を失ってしまった千家は窮迫することとなるが、旧長州藩の面々はその苦しい時期の千家を恩返しとして支えることとなるのである。

明治中期になって再浮上を果たした千家では、一楽二萩三唐津のキャッチフレーズをもって萩焼の宣伝に努め、茶陶萩焼の地位が確立していくこととなるのである。

第2は会津本郷焼である。蒲生家の瓦生産を嚆矢としつつ、保科正之が美濃から陶工を招いたことによって本格的な陶器生産が開始された。近世中期には磁器生産も行いうようになっていく。

この会津本郷焼は、近代に入ると通信・電力用の絶縁体である碍子の産地となっていくのである。その切っ掛けは、幕末の戊辰戦争に際して白虎隊として戦ったうち、飯盛山での自刃に失敗して辛くも生き残った飯沼定吉(改名して飯沼貞雄)の役割が大きかった。

飯沼貞雄は、逓信省にあって会津本郷焼製の碍子を受け入れる担い手になるだけでなく、日清戦争に従軍した際には陸軍省で用いる軍需用の碍子に意見できるポジションに就いていたのである。そのような人的な側面に加えて、品質面でも会津本郷焼は碍子に適合的であった。会津本郷焼は素焼工程を省略するという特徴を持っていたために、燃焼コストを削減できただけでなく、会津が他の陶磁器産地と比べて著しく労賃が安かったこともあり、労賃コストをも削減することが可能であった。それらは品質と反比例の関係となるが、雨ざらしで使用され定期的に交換をする事を前提とした碍子には、それで十分な品質だったのである。

日本のものづくりと言うと、職人技の精密なものづくりをイメージしがちであるが、定期的な交換を前提とした、それに見合うだけの品質を提供するものづくりもまた、日本のものづくりの一側面であったといえる。

長州と会津という、戊辰戦争で分かれて戦った2藩のそれぞれの陶磁器産地は、近世期には双方とも陶器と磁器を共に作るという共通点を持ちつつも、両者が近代に辿った道筋は以上のように対角的であった。

第3は生き残り戦略に失敗した産地として三川内焼を取り上げた。三川内もまた豊臣秀吉の朝鮮出兵に前後して、平戸藩の松浦家が誘致した朝鮮人陶工によって始められた。早くも江戸後期には、ティーカップを出島から輸出するほどの産地であった。

ところがその三川内焼は近代に入って大きく伸び悩みを見せることとなる。その大きな理由は、官僚の兄弟であった評論家が、事実とは異なるコメントを自信満々に言い、後

に枢密院議員ともなる高級官僚の兄弟ゆえに箔を付けられてその言葉が権威を持ってしまったために、多くの者たちがだまされてしまった結果であった。

伝統的な三川内焼の原料粘土は、近代における西欧向け輸出においては純白を出せないという意味で不向きな原料であった。ところが評論家が、デザインが昔よりも劣化したというコメントを発したために、当時の官僚や学者たちもがその評論家のコメントに影響され、産地に意匠・デザインの研鑽を求めたのである。

三川内焼では悲しいくらいに真摯に意匠・デザインの改良に取り組んだのであるが、隣接する有田焼などの隆盛を尻目にして、生産は伸び悩んでいった。純白を出すことができない昔ながらの原料粘土に、輸出に向けた純白磁器用の天草陶石よりも高い費用を払いながら、ひたすら真面目に生産を続けた結果であった。

第4は京都の清水焼である。清水焼については戦時期においても丸芸・丸技として優遇されることとなる、高級美術陶器という観点から取り上げた。

戦時中、京都の陶磁器業もその大半が軍事転用されたため、工業用陶磁器生産が中心となり、日用陶器は不要不急産業として整理されることとなった。しかしながら、楽吉左衛門、永楽善五郎、宮永東山、清水六兵衛らをはじめとする近世以来の清水焼の生産者が、河井寛次郎、石黒宗磨、富本憲吉といった美術陶器作家らとともに保護されることとなるのである。その状況を資料紹介の解題という形態で紹介している。

以上の4産地を分析したことにより、設定した研究目的に対して次の結論を得た。近世期から近代にかけて生き残りを実現した産地は、それぞれ一様の生き残り戦略があったのではなく、個々の産地でそれぞれ独特な生き残り戦略を計ったことが判明した。近世期において共に陶器と磁器を生産していた萩焼と会津本郷焼が、近代に入って萩焼は陶器生産へ、会津本郷焼は磁器生産へと、その中核を傾けていったのは象徴的である。

萩焼は原料粘土が磁器に向かないという特徴を、千家との関係性によって茶陶として成功した。また会津本郷焼は、素焼工程を持たないという生産面での特徴が、コスト削減に利用しつつ官需用碍子への売り込みに功を奏した。また、京都の清水焼は陶器作家と伝統的な生産者が集ることにより、高級陶磁器産地としての地位を確立していった。粘土の品質、生産技術、市場状況など、各産地の置かれている状況に上手く対応できた産地であったからこそ、生き残りが可能であったのである。

一方で三川内焼は、原料粘土の特質を全く無視し、評論家の言論に影響されて全く見当

違いの対策に尽力してしまった。高級官僚の兄弟であったために、国の要職も次々と歴任した評論家であったが、どんなに肩書きを並べてもその言論は単なる素人の戯言に過ぎなかった。しかしながら評論家の肩書きが立派であったため、官僚も、学者も、三川内の生産者達も、皆がまんまと騙されてしまったのであった。

ここから分かることは、マニュアル化出来るような普遍的生き残り戦略などなかったということである。いかに、それぞれの産地の置かれている状況、抱えている問題をそれぞれ正確に把握し、適切に対応できたか否かが重要であったといえる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

宮地英敏「近代における三川内焼の評判と生産状況 - 国の報告書が産地に与えた影響 - 」『地球社会統合科学』23-1号、31-45頁、2016年、査読有

宮地英敏「書評 大森一宏著『近現代日本の地場産業と組織化 輸出陶磁器業の事例を中心として』」『経営史学』51-3号、65-67頁、2016年

宮地英敏「占領期沖縄における尖閣諸島沖の海底油田問題」『エネルギー史研究』32号、107-128頁、2017年

宮地英敏「資料紹介 京都産業局商工貿易課編『京都陶磁器業の実態』」『経済学研究(九州大学)』、84-2・3号、79-92頁、2017年

宮地英敏「会津製碍子の官需への採用についての一考察」『エネルギー史研究』33号、75-90頁、2018年

〔学会発表〕(計4件)

宮地英敏「近代における萩焼の経営戦略」経営史学会西日本部会、於九州産業大学、2015年

宮地英敏「戦後沖縄における発送電部門の業態について」経営史学会第51回全国大会、於大阪大学、2015年

宮地英敏「近代における長崎県三川内焼の評判と生産状況 - 国の報告書が産地に与えた影響 - 」経営史学会西日本部会、於佐賀大学、2016年

宮地英敏「会津本郷焼碍子の官需への採用についての分析 - なぜ、有田焼や日本陶器で

はなかったのか？」経営史学会西日本部会、於九州大学、2018年

〔図書〕(計3件)

坂井基樹・浅野靖菜編(市野晃司・遠藤ケイ・岡本直久・寺田康雄・永峰美佳・宮地英敏・広若剛・米原有二)『炎を操る 刀・やきもの・ガラス - 1050度、美の誕生』LIXIL出版、2016年

化学史学会編(亀山哲也・梶雅範・金城徳幸・吉本秀之・宮地英敏ほか多数)『化学史事典』化学同人、2017年

北澤満編著(木庭俊彦・西尾典子・長志珠絵・筒井一伸・宮地英敏)『軍港都市史研究 佐世保編』清文堂出版、2018年

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.odn.ne.jp/~cbg67260/profile.html>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

宮地英敏(九州大学附属図書館付設記録資料館・准教授)

研究者番号：90376575